

164

2019. 12. 15

長崎郵趣

大日本長崎新大
上野彦

天の日本日 一殿

。○平草。生江、淮、荆、楚、秦、蜀、山川之野。根似蘆，葉似柳，子似榆，花似桑，子實味甘，可食。根亦可食。

【1887】 HONG KONG 8. 26 → NAG 料金:

上
頃も静かになつた。春暉が家へ丁度着く。

野彦馬宛

甲子連考の要旨を講義する學問
で、又、又、本源論文として本題（甲子
説）と、著述者（ホーリー）と、小出一
人（西田）と、馬場義典（西田）と、西田の西
洋の二、三の學問（學問）と、學問の
諸問題は大いに興味ある事実である。

SAKI 8.30 → 長崎 8.30 ハ便
DC 8.31 横浜
の洋服、なるべく本物の品を手に入れ
ます。また、この類は機械の紹介もあれば

上野彦馬宛 香港到着便
伊藤純英

上野彦馬宛の香港からの手紙

伊藤 純英

標記のようなカバーを入手できた。深夜25時55分のバトルであった。数日前からその日を待っていた。念願かなってようやく入手。十日ほどでイギリスから到着。カバーの裏面の画像は到着後初めて見ることができた。

差出人は上野才造ということで、親類縁者に間違いない。この上野才造は上野撮影局の香港支社長として2年後支店を任せることになる。とすれば、この手紙は支店開設のための予備調査として出張時に出されたものとみて間違はない。

*****以下引用*****

上野 彦馬／フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

上野彦馬は、幕末期から明治時代にかけて活動した日本の写真家（写真師）。日本における最初期の写真家で、日本最初の戦場カメラマン（従軍カメラマン）としても知られる。

天保9年（1838年），長崎銀屋町で蘭学者・上野俊之丞（しゅんのじょう）の次男として生まれる。広瀬淡窓の私塾，咸宜園で2年間学び，咸宜園を離れた後の安政5年（1858年）にはオランダ軍医ポンペ・ファン・メールデルフォールトを教官とする医学伝習所の中に新設された舎密試験所に入り，舎密学（化学）を学んだ。このとき，蘭書から湿板写真術を知り，大いに関心を持つ。同僚の堀江鐵次郎とともに蘭書を頼りにその技術を習得，感光剤に用いられる化学薬品の自製に成功するなど，化学の視点から写真術の研究を深める。また，ちょ



うど来日したプロの写真家であるピエール・ロシェにも学んだ。その後，堀江とともに江戸に出て数々の写真を撮影して耳目を開き，文久2年（1862年）には堀江と共同で化学解説書『舎密局必携』を執筆する。

同年，故郷の長崎に戻り中島河畔で上野撮影局を開業した。ちなみにこれは日本における最初期の写真館であり（ほぼ同時代に鵜飼玉川や下岡蓮杖が開業），彦馬は日本における最初期の職業写真師である。同撮影局では坂本龍馬，高杉晋作ら幕末に活躍した若き志士や明治時代の高官，名士の肖像写真を数多く撮影した。

維新後の明治7年（1874年）には金星の太陽面通過の観測写真を撮影（日本初の天体写真。また，アメリカからもジョージ・デビッドソンが来日している。），明治10年（1877年）には西南戦争の戦跡を撮影（日本初の戦跡写真），同年に開催された第1回内国勧業博覧会では鳳紋褒賞を受賞するなど，その写真は歴史的，文化的にも高く評価されている。

一方で海外に支店を持つ（ウラジオストク，上海，香港）など写真業繁栄の傍ら後進の指導にもあたり，富重利平や田本研造ら多くの門人を輩出した。明治37年（1904年），長崎で死去。享年65。

*****引用ここまで*****

手紙の書き込みにある「チベット号」は香港から長崎の直通ではなく，上海経由だろうが，わずか4日で長崎に着いている。直系の子孫は現存していないとのことなので，手紙類も世界中に散逸して残っているのであろう。上野彦馬宛二つ折り手形はがきを知人から見せられ解説したことがあった。今後も手紙類は出てくると思われる。